

# 予科練平和記念館だより

平成22年2月2日(火)開館



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍、町の歴史に関する資料、体験談などを収集しています。ご存じの人はぜひご一報ください

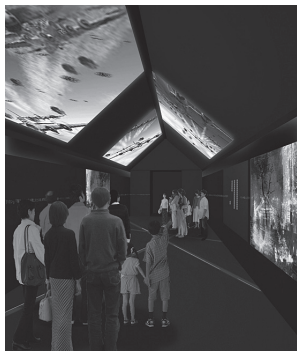
**平**成22年、新しい年がはじまります。12月31日と1月1日は連続した日でありながら、午前零時を境にしてその様相が大きく変わります。気ぜわしい31日が終わり、1月1日になると、魔法にかかったように何となく晴れ晴れとした気持ちになるのは、何度新年を迎えても不思議なことだと思えます。皆さんの一年が素晴らしいものになりますようにとお祈りいたします。今年、『予科練平和記念館だより』のはじまりとさせていただきます。

今月号は、予科練平和記念館の常設展示室6からご紹介いたします。

●レポート3  
予科練平和記念館の展示室6「窮迫」からエピソードまで

昭和16(1941)年12月の太平洋戦争開戦後、しばらくは勝ち戦を続けた日本ですが、約6か月後のミッドウェー海戦で大敗してからは劣勢に転じます。消耗戦を続ける日本は、本土を戦場にしないためのラインとして、「絶対国防圏」を定めてこれを死守しようとはしますが、圏内の島は次々と攻略されてしまいます。そこには米軍の飛行場が

作られ、ここから飛び立った爆撃機などによって、日本の主要な都市が空襲を受けるようになりました。昭和20(1945)年に入り、空襲がますます激しくなるなか、予科練教育を行っていた土浦海軍航空隊も攻撃目標となります。予科練習生だけではなく、付近の住民も巻き込んで大勢の人が亡くなった阿見の空襲。それは昭和20年6月10日、日曜日の朝のできごとでした。展示室6「窮迫」(左写真)では、展示室の天井と壁



面に映し出される映像によって、当時の状況や空襲の恐ろしさを擬似的に体感することができます。また、実際の空襲を体験した人たちが、その様子を映像のなかから語りかけます。

展示室6を抜けると、白い壁と外が見える四角い窓、そして言葉が記されただけのスペース(右下写真)になっています。窓に切り取られた空

は、空襲があったあの日と同じかもしれない。そんなことを考えさせてくれる静かな空間です。しかし、平和な現在



ないかもしれない。航空機による特別攻撃で亡くなられた人は、陸軍が約1400人、海軍が約2500人といわれていますが、このうち予科練出身者は約1700人であり、海軍の航空機による特別攻撃戦死者の約7割にあたります。展示室7「特攻」では、予科練と「特攻」作戦のかかわりを、練習生の全戦死者約18000人と同じ数の光が浮かび上がる展示室のなかで紹介していきます。

とは違い、当時の日本では、非情な作戦が決行されようとしていました。絶対国防圏が破られ、各地で玉砕が相次ぐ状況のなか、米軍のフィリピン・レイテ島上陸を阻止するために提案された作戦、それは、少ない兵力で確実に戦果を挙げるため、爆弾を抱えて体当たり攻撃をする特別攻撃、通称「特攻」です。特攻といえば、鹿児島にある陸軍の知覧飛行場から飛び立つ少年飛行兵たちを思い浮かべる人も多いと思いますが、最初の特別攻撃は海軍によって行われ、土浦海軍航空隊で予科練時代を過ごした甲種第10期生を中心として隊が編成されたことは、あまり知られてい

多くの犠牲を払い、今なお続く傷を残して終わった戦争。復員した予科練習生たちはそれぞれの生活へと戻り、戦後の混乱期から高度経済成長を経て激動の昭和を駆け抜けました。予科練時代の期や種別を超えた(財)海原会が結成され、亡くなった練習生たちの慰霊祭が今も続けられています。「平和」であることを意味する言葉からつけられた「平成」の時代となって22年目に入りましたが、世界中が平和であるとはまだ言えない状況にあります。これから先の未来をどうするかは、今を生きる私たちにしかありません。過去を知り、未来を見つめる。予科練平和記念館のメッセージであり、エピソードです。